

学 位 論 文 要 旨

氏 名 立本 千寿子

題 目 幼児の心身と音・リズムの聴取に関する心理学的研究
ーそだちの場における母体心拍音を軸としてー

学位論文要旨（和文2,000字又は英文1,000語程度）

音・リズムが人間に与える影響は、これまでも、国内外において、複数の分野で研究が進められ、その有効性が示されてきた。しかし、実際に保育・幼児教育現場や家庭などのそだちの場では、そのような有効性が理解され、保育生活や育児に活かされているとは言い難い。また、幼児にとって、家庭以外のそだちの場では1対1の関わりが保障されることは稀であるが、慣れ親しんだ母子関係や家庭といった空間から離れて、安心感をもって初めての社会で過ごすことは、幼児の心身の発達において重要である。

本研究では、音・リズムの聴取を軸として研究をすすめるが、音・リズムの中でもすべての人間が、同じくらいの期間、胎内で聴取して産まれてくる音・リズムであり、人種によってもその音色やテンポに大差や偏りがない母体心拍音に着目して5つの研究を行った。そして、①母体心拍音の音・リズムが乳幼児に与える影響と実践での活用可能性に関して、そだちの場に関わる者の認識のバリエーションを検討すること、②母体心拍音の音・リズムを聴取した際とその他の音源を聴取した際の幼児の反応の違いを、心拍数を指標として明らかにし、母体心拍音を聴取することによる影響を検討すること、③母体心拍音と同じく、メロディー（旋律）のない音・リズムを、保育・幼児教育実践で用いることの意義について検討することの3点を目的とした。

本論文は第1章から第5章で構成されており、以下にその概要を述べる。

第1章では、問題の所在を述べ、幼児にとっての音楽がもつ意味やそだちの場における音楽実践、胎児期から幼児期までの発達における原初的な音楽の世界について述べたうえで、本論文においてメロディー（旋律）のない音・リズムに着目することの意味を論じた。そして、母体心拍音の先行研究を概観し、本論文の目的に至るまでの流れについて述べた。

第2章では、研究Ⅰ・研究Ⅱ・研究Ⅲで目的の①を検討した。具体的には、環境構成としての母体心拍音の音・リズムが乳幼児にどのような影響を与えるのか、そだちの場における母体心拍音の音・リズムが重要な他者と乳幼児の直接の関わりにおいて乳幼児にどのような影響を与えるのか、母体心拍音の音・リズムをそだちの場での実践に用いる可能性、の3点についてのそだちの場に関わる者の認識のバリエーションを検討した。なお、研究Ⅰでは医療従事者、研究Ⅱでは保育者、研究Ⅲでは親を対象として調査を行った。その結果、幼児にとって身近なそだちの場に関わる者は、母体心拍音の音・リズムに肯定的な認識を有することが示された。

第3章では、研究Ⅳで目的の②を検討した。具体的には、私立幼稚園ならびに認定こども園で幼児109名を対象に、無音の状態、オルゴール音聴取時、母体心拍音聴取時の幼児の心拍数を比較し、「母体心拍音の音・リズムは、無音やオルゴール音と比較して、幼児の心拍数を減少させるのではないか。」という仮説の検討を行った。その結果、母体心拍音の音・リズムは、無音やオルゴール音と比較して、幼児の心拍数を減少させる可能性が示された。

第4章では、研究Ⅴで目的③を検討した。具体的には、母体心拍音と音や音楽的な要素は異なるものの、メロディー（旋律）のない音とリズムのみで構成されるという音楽構造が同じである手作り楽器（マラカス）の、音・リズムの聴取・表現力と、幼児の探求的な行動との関連を検討した。その結果、3歳児クラスでは、音・リズムの聴取・表現力と探求的な行動とは、正の関連があると考えられた。また、研究Ⅴの結果をもとに、音・リズムを保育・幼児教育実践で用いることの意義について示した。

第5章では、第2章から第4章までの研究結果をまとめ、本論文の保育・幼児教育実践への貢献性と、本論文で得られた知見からの保育・幼児教育実践への提案を、環境構成と活動を想定して論じた。そのうえで、今後の展望として、研究対象を広げて検討するなど本論文の知見をさらに検討すること、第5章で提案した実践を検証することの必要性があることを述べた。

以上、本論文の軸は音・リズムの聴取であり、「音・リズムの聴取を軸とした幼児の反応」と「音・リズムの聴取を軸とした実践」の研究に大きく分けられた。「音・リズムの聴取を軸とした幼児の反応」については、母体心拍音の音・リズムは、幼児にとって肯定的な影響がある外界からの音源であることが示唆された。また、「音・リズムの聴取を軸とした実践」については、メロディー（旋律）を伴う保育・幼児教育実践に加えて、母体心拍音のような音・リズムのみで構成された音源を用いることの可能性が示唆された。